

寒月と声交し合ひ一人旅

福のり子

東の間の夕日や小歩危駅の冬

小嶌和

しはぶきはコソコソと言ふ森の民

大石高典

おかぼ煮る冬至の習ひ婆ちやん子

中島冬子

冬日射す父の亡骸母に寄せ

加藤剛

夕暮の町や鼯が辻に消ゆ

齋藤亜矢

夜鳴蕎麦その辻あたり曲がり来よ

有岡萃生

消えかかる措辞追ふ朝の蒲団かな

朝田玲子

山門を出ればこの世の天高し

田中白秋

爆弾を箸に真二つ関東煮

福江ちえり

冬の夜や遺品となりし馬上杯

片山旭星

冬の夜や少し安堵の脈を取る

河村純子

核検査室鉄扉なり凍つる朝

牧田満知子

底冷や地に十字切る無言館

富沢壽勇

望遠鏡に踏台を置き冬銀河

森川恵美子

牡蠣剥くや波形の殻へナイフの背

鈴木大輔

夫へ入浴介助を受けて冬至の湯

大野千鶴子

春待つやオスロの夜の平和賞

田中勝

肖像画のモデルに老いの秋思かな

植田清子

登校の子は見逃さず初氷

氷室集

枯菊を焚く「高砂」を謡ひつつ

加藤広文

いくたびとなく降り来たり木の葉雨

加藤剛

水鳥の群れゐる塩田跡地とや

小畠和

足跡を追ひつ逃しつ雪の獵

昌山瑠美子

おかへりと言ひ合ふけふのおでんかな

鈴木大輔

江戸普請四谷塩町寒の雨

牧田満知子

笈摺のうしろ姿や初しぐれ

田中白秋

寄鍋の湯気の向かうや父百歳

河村純子

犬の尾のゆらと飛びだす芒原

宮坂美緒

文旦をいただく仲となりにけり

有岡萃生

木版の二色に刷るも悴みて

谷口文子

冬空や触腕長き烏賊を釣る

大石高典

礼拝へ白のセーター新しく

福江ちえり

餅搗の臼に湯気立つ香り立つ

田中勝

正月の凧や鉄橋ゆく列車

碓氷芳雄

鼓の音肅々として能始

國兼弓華

年越すや青空に魂返したり

原順子

虎落笛寝つけぬときの部屋広し

小堀尚美

マホガニーのピアノ遺せし冬館

富沢壽勇

氷華集

2025年2月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

乾眠するとや熊虫に空つ風

朝田玲子

チャート層剥き出しの崖山粧ふ

齋藤亜矢

冬ぬくしひと間に過ごす赴任先

有岡萃生

蓮根の十個の穴に十の謎

谷口文子

けふ無事にあること蕪の丸きこと

鈴木大輔

後継がずと言ひ捨つる子よ柿赤し

河村純子

托鉢の来ること谷戸の名の木枯る

片岡和子

葬列や鳥の渡りを追ふやうに

福のり子

煤逃の口実いまや尽きかけて

城戸崎雅崇

子を傘へ父は濡れ身の初時雨

中島冬子

風邪籠る三日ミイラとなる思ひ

大石高典

立冬や紺ひと筋の水平線

福江ちえり

樹より樹へ鳥の突き抜け暮の秋

加藤 剛

閑かなり寄するも引くも秋の潮

津嘉山典

冬鷗群れ来るときや能登の海

中井昭雄

秋あかね刈り揃へたる小柴垣

牧田満知子

鳩笛は日暮の音色暮の秋

片山旭星

被爆地の冬の灯し火平和賞

田中 勝

鍬のおと等間隔の冴ゆる朝

碓氷芳雄

氷室集

真ん前は闇の岬や星流る

加藤広文

風の棲む島や冬木の曲り立つ

片岡和子

虚子文学館その先の秋の浜

宮坂美緒

なほ残る渋谷の路地や石露の花

朝田玲子

月満ちて杜に暗がり生まれけり

田中白秋

小春風ひねもす磯に根魚釣る

牧田満知子

白足袋に足の冷たし能役者

河村純子

いたづらに明るき駅舎冬の暮

大石高典

鉄塔を等間隔に山眠る

有岡萃生

駆け降りる影と纏るる落葉山

鈴木大輔

間に合はぬ夜となりにけり冬支度

加藤 剛

栗踏めば縄文のこゑ聴へたり

津嘉山典

夜神楽へ面を掛けたり控室

丹羽康夫

祖母の縫ひし綿子の重さ懐しく

石上敦子

機関士一筋勤労感謝の日

山本京子

手の甲の少しひりひり冬初め

谷口文子

隆起せし奇岩に冬の落暉かな

柳堀悦子

懸崖菊百の手遣ふ菊師かな
菰卷や庭師の太き無骨の手
円空の墓つづまやか木の葉散る

高松房子
幸城麗子
小堀恭子

氷華集

2025年1月の雑詠から尾池和夫抄出

十六夜の火山湖に跳ね魚の音
秋霖や椅子にたれかのぬし温み
閑けさや樹海の底へ落葉道
街道の先より暮れし曼珠沙華
書き込みの多き本読む源義忌
秋風や透きとほりゆく大伽藍
踏み鳴らすは秋の天狗や能舞台
茶畑の敵とばかりに零余子採る
名月を背伸びして見る心地かな
揺るるものばかりを揺らし秋の風
移住とて移民のごとし十三夜
献杯の後に間のあり秋の暮
野葡萄の触るるばかりや杣の道
影踏みに大人が興じ後の月

氷壺集
齋藤亜矢
朝田玲子
伊東弥生
有岡萃生
河村純子
田中白秋
谷口文子
中島冬子
加藤 剛
鈴木大輔
片岡和子
佐藤慎一
牧田満知子
福江ちえり

つちのこや腹に重たき夜食摂る	大石高典
年縞に氣候變動知る秋気	津嘉山典
道なりの等々力溪谷照紅葉	富沢壽勇
白樺や音無き道の秋のいろ	田中 勝
子へ宛名書く小包や柿の秋	碓氷芳雄
	氷室集
角切られ安堵のやうに鹿の去る	河村純子
かけつこに負けて山盛り栗ごはん	谷口文子
酔ふ友の姿はじめて星月夜	宮坂美緒
妻帰るまではひとつの秋灯	鈴木大輔
馬追や句点の如く本の上	加藤広文
毒茸を齧りて学ぶことの有り	大石高典
太蔓にてこずる夜長箆を編む	伊東弥生
初鳴の水尾寄り添うて水月湖	柳堀悦子
悪役の顔して林檎齧りけり	有岡萃生
庭石のいろの覚めゆく秋の雨	朝田玲子
雁や風吹き渡る三方五湖	加藤 剛
かやぶきの風に揺れゐる蕎麦の花	田中白秋
菊膾苦手な子らはコロッケに	宮坂千種
錦秋や五湖それぞれの色を持ち	田辺美千代
絶景をもて遊ぶがに霧時雨	津嘉山典

若狭より粕漬の着く秋日和

牧田満知子

桐は実に風の育てる波頭

片岡和子

秋色の切絵めくなり北の国

田中 勝

秋ぐもり湖面のごとき若狭湾

城戸崎雅崇

ふぞろひの有りの実ふたつ御裾分

幸城麗子